慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南三井家交通記録集
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.9 (1940. 9) ,p.1333(153)- 1338(158)
JaLC DOI	10.14991/001.19400901-0153
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400901-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

情操論が國富論が出るまで佛蘭西であまり注意を惹かなかつたのは、「一部はアッベ・ブラヴェの飜譯のせいだ」とした、と傳へて居る(D. Stewart: Works, vol. x. p. 86.)。またラ・ロシュフコウ公がブラヴェ以前から飜譯に着手し、プッフレエ・ルウヴェル伯爵夫人はその計畫を友人に漏らしたと言はれるが、何れも實現しなかつた(J. Rae: Adam Smith, p. 93, 199, 339.)。この外「テユルゴー氏」と稱せらるゝ人によつても試みられたやうである(Recherche, tr. par Blavet. 1800 p. xxv.)。一七九八年に第三の佛蘭西譯が出た。コンドルセー未亡人、グルシー夫人の Théorie des sentimens moraux ou essai analytique sur les principes des jugemensque portent naturellement les hommes d'abord sur les actions des autres, et ensuite sur leurs propres actions: suivi d'une dissertation sur l'origine des langues par Adam Smith, traduit de l'anglois sur la septième et dernièr édition par S. Grouchy...Elle y a joint huit lettres sur la Sympathie. Paris がこれであつて、クーザンはこれを忠實、流暢だと評して居る(Théorie, tr. par Mme S. de Grouchy 1860. p. xii.)。この飜譯は一八三〇年及び三八年に版を重ねられ(兩版共再版と印刷されて居る)、一八六〇年にH・ボオドリアールの緒言を附してギヨウマンから新版が出された。

獨逸では一七七〇年に第三版によるラウテンベルク Chr. G. Rautenberg の Theorie der moralischen Empfindungen von Adam Smith. Nach der dritten Englischen Ausgabe uebersetzt. Braunschweig. が譯者匿名で、一七九一―九五年にコオゼガルテンの Theorie der sittlichen Gefühl. Übersetzt, vorgeredet, und hin und wider kommentirt von Ludwig Theobul Kosegarten. Leipzig. が出版された。後者は第一卷は四または五版から、第二卷は第六版から譯出された。また近く一九二六年にウオルタア・エックスタイン Walther Eckstein がその優れた解說を附して Theorie der ethischen Gefühle を出した。その外の國では露西亞にビビコフの Teorüa nravstvennykh chuvstv. 1868 がある。本書には邦譯はない。

私はこゝで遂に彼の不朽の名著「國富論」を取扱ふべき時に來た。しかし既に餘りにも彼の前半生の業蹟に就いて筆を費し過ぎた。私は更に別の機會に本稿を續けたいと思ふ。

南三井家交通記錄集

野村兼太郎

徳川時代の旅行がどんな狀態であつたかについて、今日とは全く違つて今となつては想像にも及ばぬやうなことが多い。「旅は道づれ世は情け」といひ、「可愛い子に旅させろ」といひ、旅は憂きもの辛いものと考へてゐた。江戸から京大坂に行くのは勿論、鎌倉、大山あたりに出かけるのさへ相當の旅行であつた。況んや仙臺、それから奥へかけての旅は大旅行であつた。旅は世間を知る修業の方法でもあつた。

かうした時代に旅に依つて得らるゝ知識や經驗は相當大であつたらうと思はれるのに、案外それらの知識や感銘を後に遺してゐる旅日記の少ないのはどうしたわけか。美文を連ねて景色を賞したり、案内記のやうな名勝古蹟の記述は多いが、旅の實感がにじみ出るやうな旅行記は極めて少ない。自己の經驗を赤裸裸に語ることをむしろ恥とした時代の風に禍されたこともあらう。又旅宿についても落ついて感想を整理し得ないほど交通宿泊の設備も出來てゐなかつたがためでもあらう。旅の費用を詳細に記述したものさへあまり多くはない。ところどころに思出したやうに費用を記してゐるが、全體でどのくらゐかゝつたのか、各地での金錢の相場はどうだつたか、あまり明記し

てゐない。日本人の經濟的觀念が極めて發達してゐなかつたとさへ思はれるほどである。それだけ經濟史の資料として旅日記は重要性が乏しい。

南三井家の當主である高陽男がその所藏される古文書中、德川時代交通史の資料として有用な、江戸その他への往來記錄類を選出し編纂されたことは、從來この種のものの甚だ少なかつたわが經濟史學界に貢獻さるゝこと頗る大である。殊にそれらの記錄が單に人に示さんがためにものした美文ではなく、實際の狀態を必要に應じて記錄したものであり、經濟史の資料として頗る價値の多いものであるから、その公刊は從來の乏しさを補ふものとして斯界の歡迎を受くべきものである。

その收錄されたところを見ると、古きは三代目高邦の延享元年（一七四四）の江戸下りに始まり、明治十四年の高弘東行記錄に及んでゐる。主人自筆のものもあるが、多くは隨伴者の記錄である。全篇三十九に分かつて、年代順に編纂されてゐる。その大部分が旅行準備、道中筋、見送り出迎ひの覺、土產物、道中費用等の記述であつて、讀んで必ずしも面白いといふわけにはいかないが、編者もその解說で指摘されてゐるやうに、「各種の儀禮・風習を窺ふ事を得ると共に、物價・勞銀の一部を時代により比較し得るものである。但しそこに書上げられてゐる代價は何れも高直である。例へば普通晝食が五六拾文、泊りが百五六十文ぐらゐの時代に、「下六人晝支度」に九百文、「上下拾人旅籠代」に貳貫百文といふやうに、下人の晝食に人百五十文も支拂つてゐる。但し豪富の人の旅行としては當然のことかも知れない。

しかし弘化二年の「人馬駄賃帳」（四一四頁以下）の如きは、武家の旅行の駄賃と殆ど變りがない。恐らく紀州侯の名義を假りて常に旅行してゐたためであらう。例へば二八二頁にその觸書の寫がある。

「覺　紀州御用達　三井八五郎

一乘駕籠　一挺　此人足二人

一宿駕籠　此人足二人

一分持　二荷　此人足二人

一本馬　一疋

右之通當地今朝出立別紙泊付之通差登候條道中人馬無滯可繼立者也

七月廿八日　紀州御勘定所

品川宿ヨリ大津宿迄宿々問屋中（以下略）」

この種のことは三井家のみならず、多くの御用町人の慣用手段であり、それに依つて煩雜な道中の掛合を簡單に又容易にしたのであつた。そこで人馬駄賃も一般武家のそれと變りがなかつたのであらう。

本書の大部分はかうした數字の記載であるから、あるひは一般の讀者には向かないかも知れないが、しかし中に自筆の日記類があり、そこには多くの興味ある記述があつて、當時旅行の有樣を躍如として現はしてゐる。

德川時代の旅行で何が苦痛かといへば、恐らく大雨に遭遇し、川留となり、何日も何日も逗留を重ねなければな

らなかつたことなどはその尤なるものであつたらう。「文政九年高英江戸下向旅日記」中に風雨に會し、終に大井川で川留に遭つた記事がある。その上先觸が後れたため、宿がなく困却を極めた狀況が簡單ながら目に見えるやうに書かれてある。その一節を拔いて置かう。四月三日宮を出發、（句讀は筆者）

「岡崎邊ヨリ小雨追々降出ス、赤坂御油强雨ニ成又々小雨ニ成、藤川宿ニテ薄暮ニ相成宿ノ出口邊ヨリ益風雨烈敷大キニ難澁ス、吉田宿ヘ漸夜四ツ前ニ着、然ニ定宿升屋庄七方ヘ未先觸不參、依而當宿泊り之義不存、然ニ勝七夜七ツ過ニ右升屋ニ向ケ着致候處、右升屋方先客有之、斷ニ付同人方ヨリ外差宿致呉候得共、折節頃日當所之稻荷之開帳ニ而、諸近國ヨリ群參ニ而、當宿一向宿無之、右ニ一夜困窮迚、茅屋ニ一夜ヲ明シ、明六ツ過ニ出立、尤雨ハタヨリ一しきり宛篠ヲつく如く降ル……」（二六三―四頁）

四日濱松に著し、五日雨中を金屋に至り、「大井川昨四日ヨリ川支、依而金谷ニ宿ス」とある。六日、七日、八日籌ゝとして暮らす、

「天氣至而快晴ニ而候得共、川明き不申、皆々一統愁然として只平臥、あるひは酒杯を回す而已、川向ひ嶋田宿ニて二條御番、幷ニ阿蘭陀人滯留の由。當宿之主より今日爲見舞鯛一尾到來、料理申付候、久々ニ而之長道中、殊ニ川支ニ出合、甚困窮、其止宿座敷向キ至而むさし、明日あたり川明きとか、いまた相分不申、大退屈、」

九日になつてやつと川明きとなつた。しかし未だ渡れない。御用物、御用箱が通り、諸侯などは通過するが、一般は假令それが終つてもその日は通行を許されない。

「公儀御用物川越相濟ゆ共、其日ハ諸向ニモ渡ス事不相成、其翌日ならでハ川越無之事、」（二六五頁）

とのみ記して、何ら不平がましいことは書いてゐないが、心中あまり平かでなかつたらうことは想像される。五日、

についてやつと十日に渡川することが出來たのである。

當時旅行に際しては、道中必要な多くの品物を持參しなければならない。よく板本の道中記などに必ず携帶すべきものなどを書き記してゐる。下々の旅行はかなり簡便なものであつたが、富商の遊山旅にどんなものを持つていつたか、寶曆四年四月に江戸から江之嶋、鎌倉、大山詣りの道中入用物覺を見ると、次ぎの品々が擧げられてゐる。隨伴者は下男共五人である。（七九頁）

「黑紬袷壹、木綿中形單物一、半合羽壹、帶壹、黑もゝ引壹、キヤハン一、下帶二、三尺手拭一、めりやす一、足袋壹足、ゆかた壹、木綿手拭貳袋壹、湯風呂敷一、

一柳とり壹、一毛氈貳枚、一皮どう亂一、一雨合羽ふくろ入二、一木綿さいふ一、一ちやうちんふくろ入一、一日おゝい貳、一傘袋入ニ壹本、一田夫人ふくろ入ニ壹、一香の物一曲、一わんふくろ箱共壹組、一蠟燭七挺、一三度笠貳、一下駄壹足、一櫛道具

一鼻紙六折、一たはこ壹袋、一扇子三本、一脇差小柄袋共壹腰、一酒五升、一腰提たはこ入一キセル印籠、一懷中袋もくさ火打

矢立藥入、道中藥、守、觀音經　やうしさし二、はみかき、紙入、內印籠、珠數、毛拔、針差、金入小道具入、」

遊山の小道中でこれであるから、本式の旅行には相當なものである（例へば九六頁參照）。

なほ興味ある記述を拾へば、かなり多く目つかるが、すでに編者三井氏自身がそのいくつかをその著「越後屋覺帳」中に記されてゐるから、それを參照されたい。

江戸時代の富家にして今日まで續いてゐる諸家は比較的少なく、又それらの家々に保存されてゐる文書記錄類も水火の難や虫喰ひのためになくなつてしまつたものが多く、偶々傳つてゐても、徒らに庫中に埋藏して蠹魚の餌食

としてしまふ向が少なくない。あるひは又秘して公開を憚る者も多く、あたら有用な資料を一般に利用させず、そのために學者は十分の研究資料を得られない狀態にあるといつてよい。今三井氏がその家藏の記錄を剞劂に付し、公けにされたことは學界のためによき先例ともいふべきである。資料を公にして有志の者に十分これを利用させることは、斯學にとつて必要なことである。本書はかうした資料を所有される人々に對してよき刺戟ともならう。

この種の記錄文書類を整理し印行するの勞は頗る大である。難解の文字や判讀に苦しむ文字が少なくない。しかもそれらの資料を如何に配置するか、又原本を損はず、現在の人々に讀み易からしめんためには、どうしたらよいか。そこに人に知られぬ苦心と努力とが費されてゐるのである。本書の解說を讀まれゝば、編者がこれらの資料を十分に味讀し、その配置に苦心されたことがよく推測される。この紹介の小文を終るに際し、その努力に對し深く敬意を表すると共に、本書を江湖に推薦する。（菊版五一四頁、國際交通文化協會發行、定價八圓）

前號（第三十四卷第八號）目次

◉德川時代村落研究序說　野村兼太郎
——その靜態的研究——

◉計畫化と社會科學　奥井復太郎
（國土計畫論への一省察）

◉强大國は如何なる領域的基礎を持つべきか　加田哲二
——基礎地帶・基礎海洋・國家——

◉シェバァド・バンクロフト・クロウ著「フランス國民經濟史（一七八九年—一九三九年）」　下田博

◉マックス・ベーア著『重農主義研究』　高橋誠一郎

◉岸本誠二郎教授著「價格の理論」　千種義人

◉一冊定價金五拾錢
◉半ケ年分金貳圓九拾錢
◉一ケ年分金五圓四拾錢
郵稅金壹錢五厘
郵稅共

◉編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
◉營業に關する用件は發賣元宛
◉原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十五年八月廿五日印刷納本
昭和十五年九月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
第三十四卷第九號

東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內
編輯兼發行者　江田範保

東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷者　金子鐵五郎

東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷所　金子活版所

東京市芝區三田二丁目一番地
發賣元　丸善株式會社三田出張所
電話三田(45)一九二六番～一九二七番
振替口座東京一一八五二番

◉尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

東京芝三田慶應義塾內
發行所　理財學會

振替口座　慶應義塾
芝區三田二ノ二
東京一八二〇四番